

読み物教材

郷土の先人 Ver. 4

こころ
かごしまの心
きょう せんじん
～今日，どの先人？～

小学校
1・2 年



「あなたの おし は だれですか？」



鹿児島県教育委員会

もくじ

「主題名」
しゅだいいめい

「教材名」
きょうざいめい

「登場する人物」
とうじょう じんぶつ

1 「かんしゃの 気もち」
き

「わたしたちの 家ぞく」
か

……… 1

【上白石 萌音・上白石 萌歌】
かみしらishi もね かみしらishi もか

2 「ちがっていても なかよく」

「ママが 教えてくれたこと」
ママ おし

……… 6

【AI】
あい

3 「みんなの ために」

「利右衛門さんの からいも」
りえもん

……… 10

【前田 利右衛門】
まえだ りえもん

4 「あい手の 気もちを 考えて」——「たすけられた さいごうさん」…15

【西郷 隆盛・土持 政照】

5 「くじけない 心で」——「くるしさを のりこえて」……20

【鶴田 義行】

6 「ふるさとを 思う 気もち」——「人を 思い ふるさとを 思う」…25

【八島 太郎】

じどうの みなさんへ

この本は、かごしまと かかわりのある 人たちの お話が のっています。どのお話も その人が かごしまで すごしながら 思ったことや 考えたことが 書かれています。このお話から 考えたことなどを 自分の 生かして 生かして みましょう。

※ じゅぎょう いがいても 読んでみたい 人の 話が あったら 読んでみましょう。

※ この本の ほかに かごしまと かかわりのある 人たちの お話をのせた本に 「郷土の先人」・

「続・郷土の先人」「不屈の心」・「ふるさと的心」があります。学校においてあったり、かごしまけんきょういくいんかい 鹿児島県教育委員会の ホームページに のっていたりするので 読んでみましょう。

1

かんしゃの 気もち

わたしたちの 家ぞく

うつくしい 歌声と えんぎで、かんきやくを お中に

させる 二人の しまいが います。その二人の 名前は、

あねの 上白石萌音さんと いもうとの 上白石萌歌さんです。

みなさんの 中には テレビなどで 見たことが ある人も

いるかも しれません。

二人は かごしまで 生まれそだち、今では はいゆうや

歌手の しごとをして 活やくしています。これから そんな

二人のことに ついて 話を します。

二人が 子どもの ころの ことです。

萌音^{もね}さんは、とても 元氣^{げんき}で いろいろなことに きょうみを
もって すごして いました。はじめて 会^あう人^{ひと}にも すすんで
あいさつをして すぐに なかよくなることが できました。

萌歌^{もか}さんは、きれいな 空^{そら}を ながめたり、すきなことに
お中^{ちゅう}に なって 一人^{ひとり}で あそんだりすることが すきでした。

二人^{ふたり}は、お父^{とう}さんや お母^{かあ}さんから 「人^{ひと}の 目^めを 見^みて
話^{はな}しなさい。」「人^{ひと}に 会^あったときは、 この人^{ひと}に ありがどうって
言^いえることは なかったかなと 思^{おも}いかえして 考^{かんが}えなさい。」

「考^{かんが}えないで ものを 言^いっては いけないよ。」

などと よく 言^いわれて いました。だから、

二人^{ふたり}は、「お父^{とう}さんや お母^{かあ}さんのことを

きびしい。」と 思^{おも}って いました。

二人^{ふたり}は 大き^{おお}くなり、 萌音^{もね}さんは



大学^{だいがく}じゅけんの べんきょうが うまくいかず
気^きもちが おちこんでいた 時^{とき}が ありました。

その時^{とき} お父^{とう}さんと お母^{かあ}さんから

「一生^{いっしょう}けんめい やった けっか たどりついた

場^ばしよが 一^{いち}ばん いい場^ばしよだよ。」

と 言^いわれました。お父^{とう}さんと お母^{かあ}さんの この ことばを

きっかけに 萌^も音^ねさんは「うまく いかなくなったこと、つらくて

しょうがなかった ことは なによりの エネ^えルギ^{ねるぎ}ーになり、

しっぱいも たからものになる。」と 考^{かん}えることが

できるように なりました。

萌^も歌^かさんも、十^{じゅう}八^は才^{はっさい}の時^{とき}、はいゆうの しごとを していて

自^じ分^{ぶん}の 力^{ちから}が 足^たりないと おちこんでいた ことが

ありました。その時^{とき} お父^{とう}さんと お母^{かあ}さんから、



「どの おしごとも 大へんだから 自分だけが 大へんだと
思わないほうが いいよ。はたらくことは いたみが あったり
つらい思いを したりすることも あるから 自分で
えらんだ道に せきにんを もって やりなさい。」
と 言われました。お父さんとお母さんの ことばを
きっかけに 萌歌さんは、「自分だけが 大へんでは ないんだ。
自分を ささえてくれる 人たちも くるしいことが あるから、
自分も がんばろう。」と 考えることが できるようにな
りました。

萌音さんと 萌歌さんは、きびしく しかってくれたり、
たくさんの ことを 教えてくれたりした お父さんや
お母さんの ことばを 今も 大切に しています。そのことばは、
二人が きんちようしたり ふあんになったりした 時に

ゆう^きを くれるものになっ^ています。二人^{ふたり}は、お父^{とう}さんや
お母^{かあ}さんのことを 思^{おも}うと、「ありがとう。」という 気持^{きもち}ちで
心^{こころ}が いっぱいにな^ります。



2

ちがっていても なかよく

ま ま おし

ママが 教えてくれたこと



「ハピネス」
きみがわらえば
このせかい中に
もっと もっと
しあわせがひろがる
きみがわらえば
すべてがよくなる
この手で その手で
つながる

このかしを 書いたAIさんは、中学生まで
かごしまけんで すごしました。
お母さんは アメリカ しゅっしんで、
AIさんも アメリカで すごした ことが
ありました。
このお話は、AIさんが 子どもの ときのお話です。

アンティー。これは、日本語で「おば」という いみです。
わたしには、たくさんの アンティーが います。はだの色が
ちがう アンティー。生まれた国が ちがう アンティー。
出会って すこししか たっていない アンティー。でも

※おば・・・お父さんや お母さんの 姉妹にあたる しんせき

みんな 友だち^{とも}で、家^かぞくのように なかよしです。

この アンティー^{あんてい}たちは、わたしの 本当^{ほんとう}の しんせきでは
ないけれど、わたしが 生^うまれた 時^{とき}から、ママ^まが みんなの
ことを アンティー^{あんてい}と よんでいたので、しぜん
そう よんで なかよく しています。

ママ^まは、とても 明^あるくて だれ^{だれ}とでも なかよく
なります。そして、いつでも だれにでも おなじように
話^はしかけたり、ハグ^{はぐ}をしたり します。だから すこし
はずかしいなど 思^{おも}ってしまう ことが あります。

ある日^ひ、車^{くるま}いすを つかっている人^{ひと}に
出^で会^あいました。わたしは、どうしてよいか
わからずに もじもじ していました。



※ハグ^{はぐ}・・・あいさつの かわりに あい手^てを だきしめること

すると、ママはいつものようにその人にすぐに

かけより、声をかけ、ハグをしました。わたしは、

「ええっ。なにしているの。そんなことをしたら

だめだよ。」と 思い、とめようと しました。でも ママは、

「へい！ 友だちよ。」

と わたしに 言いました。そのことばを 聞いて、わたしは、

はっと しました。それから わたしは たくさんの

アンティーたちを 思い出しました。

「そうだ。みんな友だち。そして 家ぞく だったな。」

自分とは ちがうから なかよくなれない かかわることは

できないと 思ってしまった。いました。

そうではなくて、自分とは ちがうからこそ、あい手を

知りたくなるし おたがいの すてきな ところに



気づくことが できること。そして、ちがっていても ちがいを
みとめ合い ささえ合う ことが 大切だ ということを
ママが 教えてくれました。
わたしは、ママのハグを もういちど 見て みました。
すると これまでよりも、もっと 心が あたたかく
なりました。

3

みんなの ために

利右衛門さんの からいも

今^{いま}から 三^{さん}百^{ひゃく}二^に十^{じゅう}年^{ねん}ほ^まど^え前^{まえ} 山^{やま}川^{がわ}（げんざいの 指^{いぶ}宿^{すき}市^し山^{やま}川^{がわ}）に
前^{まえ}田^だ 利^り右^え衛^{もん}門^{もん}さん という わかものが いました。山^{やま}川^{がわ}は
おかしから 米^{こめ}や作^{さく}もつが そだちに^いく^いい ところ だったので
利^り右^え衛^{もん}門^{もん}さんたちは 「た^たく^くさ^さん 食^たべ^べて おな^なか^かい^いっ^っぱ^ぱい^いに
なり^なり^りた^たい。」と い^いつ^つも お^おな^なか^かを す^すか^かせ^せて い^いま^まし^した。

ある^{ある}時^{とき} 琉^{りゅう}球^{きゅう}に 出^でか^かけ^けた 利^り右^え衛^{もん}門^{もん}さん^は、
見^みた^たこ^こが^がない な^なえ^えが は^はた^たけ^けに た^たく^くさ^さん
う^うえ^えら^られ^れて^てい^いる こ^こに 気^きづ^づき^きま^まし^した。
近^{ちか}く^くの^の人^{ひと}に この な^なえ^えに つ^つい^いて た^たず^ずね^ねると



【山^{やま}川^{がわ}（指^{いぶ}宿^{すき}市^し）が あるところ】

※ からいも・・・さつまいも

※ 琉^{りゅう}球^{きゅう}・・・げんざいの沖^{おきな}縄^{なな}県^{けん}

名前は「からいも」と言い　どんな　ところでも　そだつことが
分かりました。ゆでた　からいもを　食べた　利右衛門さんは、
「ほくほくして　くりのような　あまい　あじがする。うんまか。
うんまか。」

と　言いながら　ぺろりと　ぜんぶ　食べて　しまいました。

利右衛門さんは、「この　からいもは、おいしい上に　おなか
いっぱいになる。からいもを　山川で　そだてよう。」と

思い、からいものなえを　一つ　もち帰りました。

山川に　帰った　利右衛門さんは、からいものなえに　毎日

たっぷり　水をかけ、かれないように　大切に　そだてました。

からいもの　つるは、ぐんぐん　のびて　元気に　そだちましたが

花は　なかなか　さかず　からいも　も　できませんでした。

「もしかしたら　山川では　からいもは　そだたないのかも

しれない。」と 心しんばいになつてきました。

あつなつい 夏なつが すぎて 秋あきになり やつと 花はなが さきました。

しかし、からいものはっぱと つるは だんだんと 元げん気が

なくなつていきました。「だいじに そだてたけれど とうとう

からいもは できなかつた。なにが よく なかつたのだらう。」と

利り右え衛もん門もんさんもんも 元げん気が ありません。「もう 思おもいきつて

ひきぬこう。」そう思おもつて 利り右え衛もん門もんさんもんは からいもの つるを

ね元もとから 力ちからいっぱい ひきぬきました。すると たくさんの

からいもが 土つちの 中なかから 出でてきたのです。利り右え衛もん門もんさんもんは

「あつた。あつた。からいもが あつたぞ。」

と 大おおきな声こえで さけびました。 利り右え衛もん門もんさんもんは、

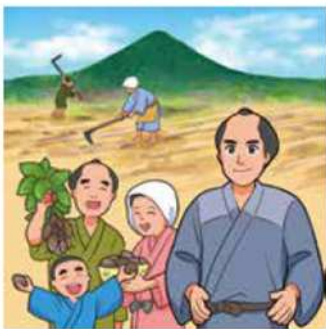
はじめて からいもを そだてたので からいもが

土つちの中なかに できることを 知しらなかつたのです。



さっそく 家^かぞく^でにて 食^たべました。みんな え顔^{がお}で
よろこんで 食^たべました。みんなの 顔^{かお}を 見^みて 利^り右^え衛^{もん}門^{さん}も
うれしく なりました。来^{らい}年^{ねん}は もっと たくさんの からいもの
なえを 作^{つく}って 山^{やま}川^{がわ}の 人^{ひと}たちにも 分^わけてあげよう。そして
おいしい からいものを 食^たべさせて あげようと
利^り右^え衛^{もん}門^{さん}は 思^{おも}いました。だから しゅうかくした
からいものは、ぜんぶは 食^たべず なえを 作^{つく}るために 大^{たい}切^{せつ}に
とっておきました。

利^り右^え衛^{もん}門^{さん}は、いろいろ ためして、たくさんの なえを
作^{つく}ることに せいこうしました。そして、できた
なえを きんじよの 人^{ひと}に くばり、そだてかたも
ていねいに 教^{おし}えて 回^{まわ}りました。にても、
やいても おいしい からいものは、みんなに



大^{たい}へん よろこばれ、遠^とくからも なえがほしいと 人^{ひと}びとが やってきました。

利^り右^え衛^も門^んさんの おかげで、山^{やま}川^{がわ}では、からいも ばたけが どんどん 広^{ひろ}がって いきました。いちめんに 広^{ひろ}がった からいもばたけを、利^り右^え衛^も門^んさんは うれしそうに 見^みつめて いました。

山^{やま}川^{がわ}では からいもを そだてるように なってから 食^たべものに こまることは ほとんど なくなりました。 村^{むら}の人^{ひと}びとは 利^り右^え衛^も門^んさんに 心^{こころ}から かんしゃしました。



やまがわ はたけ ひろ ばたけ
【げんざいも 山川の畑に広がる からいも畑】



りえもん どのこうじんじや
【利右衛門さんが まつられている 徳光神社】



りえもん なまえ か せき どのこうじんじや
【利右衛門さんの 名前が 書かれた石ひ (徳光神社)】

4

あい手の 気持ち あいて き を 考えて かんが

たすけられた むこうさん

みなさんは、西郷隆盛さんを知っていますか。

これは、西郷さんが さつまの おとのさまを

おこらせてしまい 沖永良部島に つれて

行かれた時の お話です。

沖永良部島で 西郷さんが 入るろうやは

せまくて かべも ありませんでした。食事も

昼と夜だけで、たいた ごはんに おゆをかける

とても そまつな ものでした。

西郷さんのおせわをしていた 土持政照さんは

「このままでは、西郷さんが びょう気に



【西郷隆盛さんが すごした ろうやの ようす (和泊町 西郷南洲記念館)】



わどまりちよう さいごうなんしゅうきねんかん (和泊町 西郷南洲記念館)

なってしまう。」と 考え、ごちそうをつくらせて

出しました。しかし そのたびに 西郷さんは、

「お気もちだけ ちようだい いたします。」

と言って、食べることは ありませんでした。西郷さんが、
ろうやの 中で 日に日に やせ おとろえるのを 見た

土持さんは、このままでは 西郷さんは
死んでしまうと 思い、いそいで だいかんに
会いに 行きました。

「おねがいがあります。とのさまからの
めいれい書には 西郷さんを かこいの中に
入れよと 書いて あります。家の中に
つくった ざしきろうが かこいです。そこに



※ だいかん・・・そこにすむ ひと 人びとの 生活を よりよくする人 ひと

※ ざしきろう・・・いえのなか がある ろうや

西郷さんを うつしてください。今のままでは 西郷さんは
死んで しまいます。どうか 西郷さんの いのちを
おたすけください。」

すると、だいかんは、しばらく じっと 考えてから

「ううむ。わかった。よく 気がついて くれた。家の中の
ざしきろうに 西郷さんを うつしなさい。」

と 言いました。

土持さんは 大よろこびで 西郷さんの ところへ つたえに
行きました。

「西郷さん、家の中の ざしきろうに、おうつりに なることに
なりました。ざしきろうが できあがるまでは このろうやを
出て わたしの 家で ゆっくり おすごしください。」
すると、西郷さんは、大つぶの なみだを ながしながら、



土持^{つちもち}さんの話^{はなし}をきいていました。そして、
こう言^いいました。

「土持^{つちもち}さん 本当^{ほんとう}に ありがとうございます。

わたしは このろうやの中^{なか}で いつか

死ぬ^しだろうと思^{おも}って おりました。」

二人^{ふたり}は ろうやの中^{なか}と 外^{そと}から 手^てを かたく

にぎりしめ ないて よろこび 合^あいました。

西郷^{さいこう}さんは、ざしきろうが できる までの間^{あいだ}、土持^{つちもち}さんの

家^{いえ}で すごし 土持^{つちもち}さんのお母^{かあ}さんが つくった おいしくて

えいよう たっぷりな ごちそうを いただき おふるにも

入^{はい}らせて もらい ました。

土持^{つちもち}さんは、ざしきろうを つくる 大工^{だいく}さんに

「ゆっくりで いいから。一日^{いちにち}分の しごとを 三日^{みっか}ぐらいに

分^わけて しあげる ように。」

と 言^いいました。

しばらくして ざしきろうが できあがりました。

「土持^{つちもち}さん このざしきろうは まるで ごてんの ようだ。

わたしには もったいない くらいです。ありがとう

ございます。」

西郷^{さいこう}さんは、 なんども なんども おれいを 言^いって

ざしきろうへ 入^{はい}って 行^いきました。

西郷^{さいこう}さんに とって、 土持^{つちもち}さんは いのちの おんじんであり

かけがえのない そんなざいに なりました。

※ ごてん・・・とのさま などが すむ ごうかな 家^{いえ}

5

くじけない
心で

ゆるい心を のびに



つるたよしゆき 鶴田義行さんの どうぞうと せき か ごしまし 石ひ(鹿児島市)】

鹿児島市の 伊敷という ところに 上の
しゃしんの ような どうぞうが たって
います。そのとなりの 石ひには こんな
ことばが のこされて います。

苦しい うちは ダメ
鍛錬不足の 証拠
苦しさに 慣れ 平気になつて
本当の 苦しさ 探究が 始まる

【いみ】

くるしいと 思っている うちは まだ ど力 しているとは 言えない。れんしゅうを
かさねて、くるしさに なれて、さらに 高い 目ひようへ おかつて いくことが 大切です。

みなさんは この人が だれか 知っていますか。

この人は、鶴田義行さん。オリンピックで 日本で はじめて

二大会れんぞく 金メダルを かくとくした

水えいせん手です。一回目の 金メダルを かくとくした

一九二八年の アムステルダムオリンピックでは

二〇〇メートル ひらおよぎに 出場し オリンピック

新記ろく（二分四十八秒八）を だしました。この

オリンピックで まさか 日本人が ゆうしょう するとは

まわりの だれもが 思って いません でした。鶴田さんの

名前は いっきに せかいに 広まって いきました。

そして 四年後の ロサンゼルスオリンピックでも

鶴田さんは 二〇〇メートル ひらおよぎに 出場し

金メダルを かくとく しました。その時の 記ろくは

※ アムステルダム・・・オランダの しゅと

※ ロサンゼルス・・・アメリカの 大きな と市

二分四十五秒四で、にふんよんじゅうごびょうよん 前の まえ オリンピックの おりんぴく 時より とき 三秒四も さんびょうよん

はやく にかいめ 二回目の きんめだる 金メダルを かくとく かくとく しました。 しました。

この ろさんぜるすおりんぴく ロサンゼルスオリンピックで にほんちーむ 日本チームは

ろく 六しゅ目のうち じゅうに 十二この めだる メダルをとり

「水すいえい王国 おうこく 日本」にほんと い 言われる ようにな になりました。

そして つるた 鶴田さんに あこがれ あこがれ すい 水えいせんしゅを めざす めざす

子どもたちが たくさん たくさん あらわれる あらわれる ようにな になりました。

そんな だい 大きろくを もつ もつ つるた 鶴田さん ですが、 ですが、 けっして けっして

はじめから およぎが およぎが じょうず 上手だった わけでは わけでは ありません。 ありません。

子どものころ つるた 鶴田さんは いえ 家の前を ながれる ながれる こうつきがわ 甲突川で

きょうだいや なかまと なかまと よく よく あそんで あそんで いました。 いました。ある なつ 夏の

あつひ日。 つるた 鶴田さんは その川で その川で おぼれそうにな おぼれそうになつて

しまいました。 そのころは そのころは まだ まだ およぐことが およぐことが

※ こうつきがわ 甲突川・・ かごしまし 鹿児島市を ながれる ながれる かわ 川

できなかったのです。

まけずぎらいの 鶴田^{つるた}さんは それから およぎの

れんしゅうを はじめました。もちろん はじめは ほとんど

前^{まえ}に すすむことが できません。

「くるしいなあ。でも くるしいのは れんしゅうが たりない

しょうこ。まだ まだ がんばるぞ。」

そうして 何^{なん}ども 何^{なん}ども およぎつつけて

だんだん およぐことが できるようにな

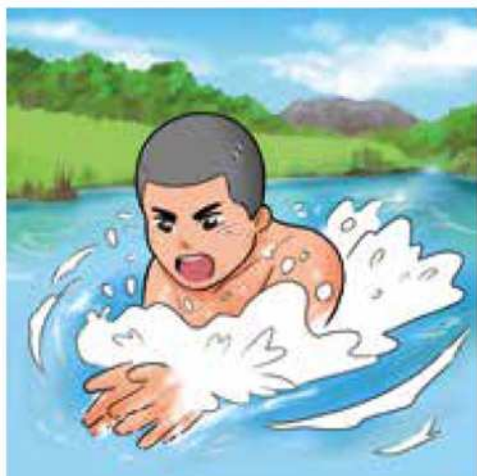
ってきました。それどころか なかまたちが

川^{かわ}の ながれに そって およいでいる中^{なか}、

そのながれに さからって 一人^{ひとり} 上りゅうへ

上りゅうへと およいでいく すがたも

見^みられるようになくなりました。



※ 上りゅう・・・川^{かわ}のながれの 上^{うへ}の方^{ほう}

おとな 大人になり

はたらくように なってからも

つるた 鶴田さんは

じかん 時間を

み 見つけ

きんこうわん 錦江湾で

およぎの れんしゅうを

しました。そのころには

かごしま 鹿児島と

さくらじま 桜島までの

おうふく

はちきろめーとる ハキロメートルを

ゆうゆうと

およげるようになっていた そうです。

この 子どものころからの

くるしさを のりこえた けいけんが

おりんぴっく の きんめだるに

つながって いったのです。



おりんぴっく しゅつ とき つるたよしゆき
【オリンピックに出じようした時の 鶴田義行さん】

※ おうふく・・・行って かえってくる こと

6

ひとを 思う 気持ち

人を 思い ひとを 思う

白い すなはまに うちよせる なみの 音。

海を わたる そよ風。

おじいさんになつた 八島太郎さんは、遠く アメリカの

地で 大すきな ふるさとを 思い出して いました。おさない

ころに 自分に たくさんの ことを 教えて くれた 山や海、

川や木、鳥や虫たち、いろいろな しごとを している 大人たち。

その どれもが 生き生きとした うつくしい ものでした。

八島さんが、生まれたのは げんぎいの 南大隅町の

根占です。八島さんは ゆたかな 自ぜんや 友だちと すごす

時間^{じかん}が 大^{だい}すきでした。

大人^{おとな}に なった 八島^{やしま}さんは 画家^{がが}となり

絵^えの べんきょうを したいと 思^{おも}って

アメリ^{あめり}カへ わたりました。

アメリ^{あめり}カでの 生活^{せいかつ}は 苦^{くる}しい ものでした。

しかし たくさんの 人^{ひと}に よろこんで

もらえる 絵^えを かくために

いっしょうけんめいに 絵^えの べん強^{きょう}を

がんばりました。

ちようと そのころ、日本^{にほん}と アメリ^{あめり}カが

せんそうを はじめました。せんそうは しだいに はげしくなり

たくさんの 人^{ひと}が なくなりました。八島^{やしま}さんが、ふるさとや

友^{とも}だちを 思^{おも}わない 日^ひは ありませんでした。八島^{やしま}さんは、



ねじめみなみおおすみちょう
【根占（南大隅町）が あるところ】

「いのちを だいじに してほしい。生きてほしい。」^{ひと}「人と ^{ひと}人がいのちを うばいあう ことは ぜったいに あってはならない。」と ^{へいわ}平和への つよい ^{おも}思いを ^え絵にかいて ^{にほん}日本へとどけました。

かなしみに つつまれた ^{せんそう}せんそうが やっと おわりました。
^{やしま}八島さんの ふるさとの ^{ねじめ}根占も ^{せんそう}せんそうの ^{ひが}ひがいをうけました。 ^{せんそう}せんそうの ^{ため}ために ^{たいせつ}大切にしていた ^し自ぜんや友だちも うしなって ^{しま}しまいました。 ^{やしま}八島さんの ^{こころ}心も ^{おお}大きな ^{かなしみ}かなしみに つつまれました。

その後、^{やしま}八島さんは、ふるさどで ^{すご}すごした ^ひ日びを えがいた ^え絵や ^{えほん}絵本を かきました。

^{とも}友だちと ^{わらい}わらいあった ^ひ日び、^{こころ}心の ^{ささ}ささえとなる ^{ひと}人との ^{つな}つながり、^{たいせつ}大切に ^{して}してきた ^{おも}思いや ^{ねが}ねがい などを

いくつもの作^{さく}ひんにこめたのです。これからのみらいを
生きる^{いき}子どもたちのために。今^{いま}を大切に^{たいせつ}してほしいと。

八島^{やしま}さんがかいたさいごの絵本^{えほん}作^{さく}ひん「海浜^{かいひん}物語^{ものがたり}」は
つぎのようにはじまります。

日本^{にほん}の南^{みなみ}のはしのしまに、遠^{とお}く
はなれて、と会^{かい}の^{もの}音^{おと}がまったく
とどかない海浜^{かいひん}が^{あり}ました。
おかしながらのしずけさが、ずっと
そのまま、そこに^{あり}ました。



かいひんものがたり たい ぶきあげはまひおきし
【「海浜物語」の ぶ台である 吹上浜(日置市)】

※ 海浜^{かいひん}・・・すなはま

八島さんは、ふるさとの根占で
 すごした 日びを えがいた
 作ひんを かいています。
 『からす たろう』・『村の樹』・
 『道草いっぱい』・『海浜物語』
 など、八島さんの 少年時代いの
 思い出や ふるさとへの 思いが
 つたわる 作ひんです。
 ぜひ、読んでみてください。

【八島太郎さんが えがいた作品
 『からす たろう』】(偕成社)



【子どもたちにかこまれる画家・絵本作家
 八島太郎さん (本名 岩松 淳さん)】
 [(株) 創風社]



かごしまけんりつはくぶつかんに ある きょうりゅうかせきです。
 この かせきの後ろに ある 大きな絵も 八島さんが えがきました。
 子どもが 大すきだった八島さんが、鹿児島の子どもたちに
 見てほしいと 思いを こめて えがきました。
 かせきとともに きょうりゅうたちが 生きていた はくりよくある
 時代いが わかる とても きちょうな ものです。

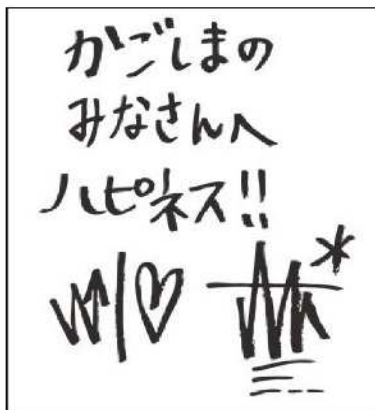
アメリカに いた
 いたのは ふるさと 鹿児島
 の うつくしい すがたと
 今を いっしょうけんめいに 生きる 大切な 人びと
 でした。

みなさんへのメッセージ



【AIさん】

今、わたしはお母さんが言っていた
「みんな友だち」ということが、とてもすてきだと
思っています。「ちがうことが、いけないのかな。」
「みんな おなじ なのではないのかな。」
「もともと、みんなを くべつしなくても
いいのではないかな。」 そう思っています。
どこに すんでいても、どんな ことばを
話しても、みんなに 楽しく いてほしい、元気で
あって ほしい。歌っている 歌にも その思いを
こめています。そして、その 思いが せかい中の
みんなに とどく ことが わたしの ねがいです。



【上白石萌歌さん】

人との ごえんや ごおんを 大切に してください。小さいころに 見た
けしきや 体けん、友だちと けんかしたことなどは 自分を つくる もとに
なります。いろいろな ことを 一ばん キャッチ できる じきだと 思うので、
まい日、朝おきて 学校に 行く だけでも すばらしい ことです。
まい日 いろいろな ことを かんじながら すごしてください。



【上白石萌音さん】

あい手が どんな気もちで いるか、これを 言ったら どういう 気もちに
なるか そうぞう力を もって 生活してください。
うれしいことや かなしいことは 大人に なって 自分をたすけて くれます。
とくに かなしいことや つらいことを けいけんすると やさしく なれます。
心が うごくことは しあわせな ことです。心を うごかすことを 大に
してください。

保護者の皆様へ

この本は、鹿児島県の子供たちのために作成した道徳の教材です。子供たちが、この本に登場する人物の考え方や生き方にふれ、自分の生き方について考えを深め、夢や希望をもって過ごしてもらえることを願って作成しました。ぜひ、この教材と一緒に読んでいただき、お子さんと思ったことや考えたことを話し合ってみてください。また、さらに知りたい、深めたい場合には下に記載している【参考・引用文献】も紹介してみてください。

【参考・引用文献】（順不同）

□前田 利右衛門

- 「かごしま文庫⑨ さつまいも一伝来と文化」（春苑堂 1994 年）
- 「令和 5 年度企画展図録 指宿まるごと博物館 XⅣ 海が織りなす焼酎文化 ～芋・技・肴・器～」
- （指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ）
- 「甘藷翁物語」（三州談義社 1966 年）

□西郷 隆盛・土持 政照

- 「西郷隆盛と沖永良部島」（和泊西郷南洲顕彰会 2011 年） 郷土の先人（土持 政照）（和泊町教育委員会）
- 「えらぶの西郷さん」（和泊西郷南洲顕彰会 1988 年）

□鶴田 義行

- 「(財)日本オリンピック委員会監修『近代オリンピック 100 年の歩み』（ベースボール・マガジン社 1994 年）
- 「南日本新聞社編『郷土の人系 中巻』（春苑堂 1969 年）「知ってるつもり」（日本テレビ 1992 年）
- 「郷土教育 第 6 号」（鹿児島県総合教育センター指導資料 2021 年）
- 「文藝春秋 第 98 巻第 1 号」（文藝春秋 2020 年）
- 「オリンピックを通してつかんだ水泳の心」（鹿児島県総合教育センター読み物教材 2021 年）
- 「南日本新聞「かごしま 20 世紀山河こえて」（南日本新聞社 1999 年）
- 「伊敷地域ガイドマップ」（伊敷地域まちづくりワークショップ 出版年不明）
- 「日本の金メダリスト事典 1 夏季オリンピック・冬季オリンピック編」（ベースボール・マガジン社 2018 年）
- 「失敗図鑑 偉人・いきもの・発明品の汗と涙の失敗を集めた図鑑」（いろは出版 2018 年）

□八島 太郎

- 「八島太郎・日米のはざまに生きた画家」（創風社 2008 年）

【協力】（敬称略、順不同）

東宝芸能（株）／株式会社 ザ・マイカホリックス／指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ／
西郷南洲記念館／西郷南洲顕彰館／和泊町教育委員会／和泊町立和泊小学校／南大隅町教育委員会

貞竹 山子／山田 みほ子／假屋園 昭彦／島津 公保／下豊留 佳奈／野間 友見／永里 智広／
山下 久美子／泉 宗弘／山口 親悟／長蘭 誠／前畑 あさよ／塩満 貞徳／所崎 陽／池来須 隆子／
坂口 洋幸／安樂 朋陽／梶 千明／諸平 幸奈／西原 真琴／西村 優子／毛利 秀喜／富吉 祐輔

学習内容一覧			
	主題名	教材名	内容項目
1	かんしゃの 気持ち	わたしたちの 家ぞく	B 感謝
2	ちがっていても なかよく	ママが 教えてくれたこと	C 公正、公平、社会正義
3	みんなの ために	利右衛門さんの からいも	C 勤労、公共の精神
4	あい手の 気持ちを 考えて	たすけられた さいごうさん	B 親切、思いやり
5	くじけない 心で	くるしさを のりこえて	A 希望と勇気、努力と強い意志
6	ふるさとを 思う 気持ち	人を 思い ふるさとを 思う	C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度

「読み物資料 ～1・2年生用～」

令和7年2月発行

編集・発行 鹿児島県教育委員会
〒890-8577 鹿児島市鴨池新町 10 番 1 号

日本音楽著作権協会（出）
許諾第 2408292-401 号

この本の副タイトルについて

副タイトルを「今日、どの先人？（きょう、どのせんじん？）」としました。

その理由は、以前、私たちが作成した「郷土の先人（きょうどのせんじん）」の続編（4作目）であるからです。

また、これまでの教材を含めて「今日は誰の話を読もうかな」と前向きに思っしてほしいという願いも込めています。